慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 応用行動分析学に基づく発達支援法の普及を目的とした保育士研修プログラム |
| Sub Title | |
| Author | 松﨑, 敦子(Matsuzaki, Atsuko) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2013 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.76 (2013. ) ,p.158- 162 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 平成24年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000076-0158 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 応用行動分析学に基づく発達支援法の普及を目的とした保育士研修プログラム

松　﨑　敦　子

発達に遅れや偏りのある児童の数は国内外で増加しており，障害の早期発見，早期介入の必要性が強く示されている。早期介入の方法は広く研究されているが，中でも応用行動分析学（Applied Behavior Analysis：以下ABAと表記）に基づく発達支援は，エビデンスに基づく支援法としてこれまで大きな成果をあげてきた。ABAは，行動の原因を個人と環境との相互作用の中に見出し，支援へとつなげる理論と実践の体系である。具体的には，子どもが自身の経験を通じて「望ましい行動」のレパートリーを増やしていけるよう，行動を起こすきっかけとなる先行刺激や，行動した結果得られる後続刺激を制御する（山本・澁谷，2009）。

現在地域での早期発達支援は，児童発達支援事業所（以下事業所と表記）がその役割を担っている。事業所では保育士を中心として集団療育や個別療育が行われており，保育士には障害児支援に関する専門的な知識と技術が要求される。しかし，障害に応じた支援方法や問題行動への対応方法を系統的に指導する研修システムはない。

そこで著者らは，ABAに基づく発達支援法を教授する保育士研修プログラムを開発し，「研究1」では事業所に勤務する保育士2名に実施し，保育士の支援技術の変化と参加児への発達促進効果を検討した。また，「研究2」では，Train-the-Trainer（TTT）モデルを用いて新任保育士2名に実施し，研修プログラムの効果と継続的な運用可能性を検討した。TTTモデルとは，研修終了者が〈トレイナー〉となり，新任者〈トレイニー〉を教育するモデルで，本研究では「研究1」で研修を終了した保育士2名がトレイナーとして参加した。

## 研　究　1

### 【方法】

#### 1．参加者

(1) 保育士：事業所に勤務する保育士2名が参加した。2名とも4年の勤務経験があり，グループリーダーとして集団・個別療育を実施していた。

(2) 参加児：事業所に通所する児童のうち，研究参加保育士が個別療育を担当する3～5歳児6名（自閉症3名，言語発達遅滞3名）が参加した。

#### 2．保育士研修（介入）

(1) 講義：著者がABAの知識，支援技術，実践に関する講義を，90分×3回実施した。

(2) 実践トレーニング：保育士2名がそれぞれ担当する参加児（各3名）への個別療育場面で，各30分，週1～2回，計15回実施した。個別療育では，保育士がメインセラピスト（療育者）として参加児と関わり，著者は保育士にフィードバックをしながらサブセラピストとして参加した。フィードバックは，支援技術の評価指標として使用したフィデリティリストに基づき，(i) 行動随伴性の説明（例：こ

のおもちゃは強化力が弱いのでおもちゃを変えましょう），（ii）言語指示（例：もう少し大げさに褒めてください），（iii）支援のモデリング（例：褒めるタイミングやバリエーションの持たせ方を実際にやって見せる）を行った。

(3) ビデオフィードバック：保育士2名と著者の計3名が参加し，各1時間，週1回，計10回実施した。その週に実施したすべての個別療育場面の映像を全員で観察し，支援方法や課題を検討し，必要であれば支援技術の練習をした。

### 3. 従属変数

（1）保育士評価

支援技術の評価：介入実施前に事前評価を，介入終了から2か月後に事後評価を実施した。事前評価および事後評価では，保育士が担当している参加児への個別療育をそれぞれ1セッション（計3セッション）ビデオ撮影し，セッション開始から5分間の映像を，本研究用に作成されたフィデリティリストを用いて評価した。介入中の評価も同様に，個別療育セッション開始後5分間を評価対象とした。フィデリティリストは，（i）環境設定，（ii）先行刺激，（iii）課題設定，（iv）強化刺激，（v）問題行動への対応の5モジュール，全40項目で構成した。具体的には，子どもが活動の見通しを立てやすいよう活動のスケジュールを視覚的に示すことができる，子どもの注意をひく時の声の高さ・強弱・速さ・タイミングが適切である，ターゲット行動の難易を必要に応じて変更することができる，強化刺激の効果をモニターし強化方法を変更することができる，問題行動があれば的確に対処できる，などであった。評価は，研究室に所属する研究アシスタントが，それぞれの項目を「できる」「できない」の2件法にて実施し，得点率を算出した。

（2）参加児評価

言語発達：介入前後に日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙（綿巻・小椋，2004）への記入を保護者に依頼した。日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙は，日本で標準化された発達検査で，子どものコミュニケーション発達のレベルを評価することができる。

対人社会性：介入前後に乳幼児発達スケール（三宅他，1989）の「対子ども社会性」と「対成人社会性」項目の評価を，事業所に勤務する臨床心理士に依頼した。乳幼児発達スケールは，約130項目からなる質問について2件法で回答する標準化された発達検査である。

## 【結果】

（1）保育士評価

支援技術評価：フィデリティリスト得点率の推移を図1に示した。

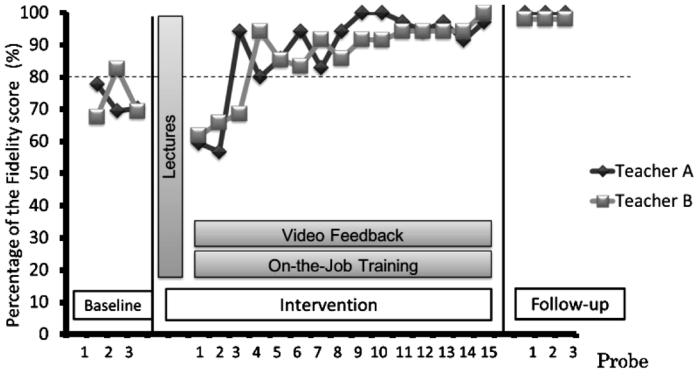


図1　保育士2名の支援技術獲得の推移

（2）参加児評価

言語発達：表出語彙，助動詞，文の複雑さの項目では5名の得点が上昇，助詞項目では6名全員の得点が上昇し，合計得点平均も，介入前646.7（*SD*＝61.1）から682.5（*SD*＝80.9）へ上昇した。

対人社会性：すべての参加児の得点が上昇し，「対子ども社会性」の得点平均は介入前1.7（*SD*＝1.5）から介入後3.7（*SD*＝2.4）へ，「対成人社会性」の得点平均は介入前4.8（*SD*＝1.6）から6.3（*SD*＝1.7）へそれぞれ上昇した。

**【考察】**

研究の結果から，本保育士研修プログラムは保育士の支援技術を向上させ，それにより参加児の言語発達，社会性の発達が促進されたことが示された。さらに，支援技術を獲得するには講義だけでは不十分であり，数回の実践トレーニングを必要とすることが示唆された。本研修は週1回所属機関で勤務中に行ったため，保育士の負担は最小限に抑えられ，プログラムの運用可能性は高いと思われる。研究2では，本研修プログラムの継続的な運用可能性を検討した。

## 研　究　2

**【方法】**

**1．参加者**

（1）保育士：事業所に勤務する保育士4名（トレイナー2名，トレイニー2名）が，トレイナー1名×トレイニー1名のペア2組となり参加した。トレイナー2名は研究1の保育士2名であった。

（2）参加児：事業所に通所する児童のうち，保育士（トレイニー）が個別療育を担当する3～5歳児4名（自閉症2名，言語発達遅滞2名）が参加した。

**2．保育士研修（介入）**

（1）講義：研究1と同様，著者がABAの知識，支援技術，実践に関する講義を90分×3回実施した。

（2）実践トレーニング：トレイニー2名がそれぞれ担当する参加児（各2名）への個別療育場面で，各30分，週1～2回，計10回実施した。個別療育では，トレイニーがメインセラピスト（療育者）として参加児と関わり，トレイナーは保育士にフィードバックをしながらサブセラピストとして参加した。

著者はスーパーバイザーとして療育場面に同席したが，フィードバックは行わなかった。
(3) ビデオフィードバック：週1回，保育士4名（トレイナー2名，トレイニー2名）と著者がセッションの様子をビデオ観察し，支援方法の検討を行った。

### 3. 従属変数

(1) 保育士評価

支援技術の評価: 研究1と同様のフィデリティリストを用いて，介入実施前に事前評価を5～7回，介入終了から2か月後に事後評価を3回ずつ実施した。介入中の評価も研究1と同様に実施した。

(2) 参加児評価

言語発達：研究1と同様，介入前後に日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙への記入を保護者に依頼した。

対人社会性：研究1と同様，介入前後に乳幼児発達スケールの社会性項目の評価を，事業所に勤務する臨床心理士に依頼した。

## 【結果】

(1) 保育士評価

支援技術評価：フィデリティリスト得点率の推移を図2に示した。

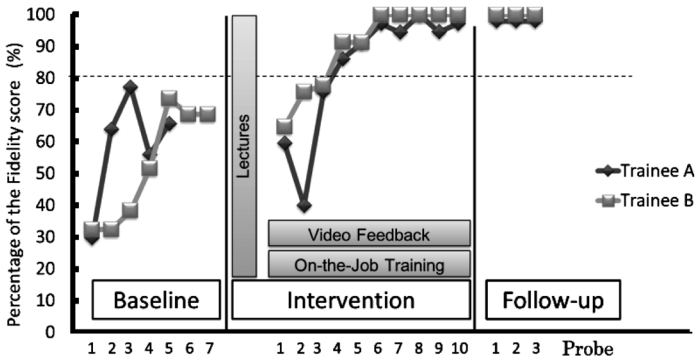


図2　保育士（トレイニー）2名の支援技術獲得の推移

(2) 参加児評価

言語発達：表出語彙，助詞，助動詞，文の複雑さ，全ての項目において，参加児4名の得点が介入後に上昇した。合計得点の平均も，介入前558.5（*SD*＝106.0）から介入後600.8（*SD*＝87.4）へ上昇した。

対人社会性：「対子ども社会性」の得点平均は介入前2.8（*SD*＝1.5）から介入後4.3（*SD*＝2.9）に，「対成人社会性」の得点平均は介入前4.8（*SD*＝1.1）から5.8（*SD*＝1.5）へそれぞれ上昇した。

## 【考察】

本研究の結果においても，保育士の支援技術が向上し参加児の発達が促進されることが示され，研修実施者が異なっても本研修プログラムが有効であることが示唆された。介入後に保育士の支援技術が向

上したことに関して，いくつかの要因が考えられる。講義は，保育士が療育場面をイメージしやすいよう，参考となるビデオ映像を使い，実践場面で起こりうる複数の仮想事例を取り入れて実施した。また，実践トレーニングでは，Mazur（2006）が説明している学習に有効な方法（言語指示，モデリング，結果の知識，参加児の望ましい行動の増加による強化，言語的強化，セルフモニタリング，及びビデオフィードバックでの観察学習など）を複数取り入れた。本研究ではこれらの方法を複合的に適用したため，どの方法がどのようなメカニズムで保育士の支援技術を向上させたのかに関しては不明である。今後はそれらの方法を一つずつ検討していく必要がある。

**【結語】**

保育士研修のTTTモデルが確立すると，専門家による介入がなくなった後も，支援技術の継承が可能になる。それにより，障害児が経済的，地理的，社会的制約を受けず，エビデンスに基づく支援を地域で受けることが可能となり，社会的にも意義は大きい。今後は，保育士が獲得した支援技術の集団場面への般化効果や，研修を受けた保育士の支援技術の変化がもたらす周囲の保育士への影響等についても検討していきながら，運用可能性，実行可能性，継続可能性を踏まえた研修プログラムの開発を進めていく。

**【引用文献】**

Mazur, J. E. (2006). Learning and behavior. 6th ed. Upper Saddle River: Pearson Education Inc.（磯博行・坂上貴之・川合伸幸（訳）（2008）．メイザーの学習と行動　第3版　二瓶社）
三宅和夫（1989）．乳幼児発達スケールType C公益財団法人発達科学研究教育センター．
山本淳一・澁谷尚樹（2009）．エビデンスにもとづいた発達障害支援：応用行動分析学の貢献.行動分析学研究, 23(1), 46–70.
綿巻徹・小椋たみ子（2004）．日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」 京都国際社会福祉センター．

# 意思決定におけるリベレーション効果の検討

三　浦　大　志

本研究では，直前の挿入課題が再認判断に及ぼす影響であるリベレーション効果（Revelation effect）が，意思決定場面でも見られるかどうかを検討した。リベレーション効果は，記憶テストを行う直前にアナグラムなどの認知課題を行うと，そうでない時に比べて記憶テストに出てくる単語をより「前に見た」と思いやすい効果である。これまでの先行研究の多くはold/new再認パラダイムを用いてリベレーション効果の生起を確認しているが，Bernstein, Whittlesea, & Loftus（2002）は意味記憶や自伝的記憶においても本効果が生起することを示している。彼らの研究は，リベレーション効果が様々な実験事態で生起する可能性を示唆している。しかし，本効果が記憶判断以外でも見られることを示した研究は現在のところ存在しない。

リベレーション効果の生起メカニズムに関しては様々な理論が提唱されているが，現在有力視されている理論の1つが基準シフト理論（Niewiadomski & Hockley, 2001）である。基準シフト理論は，再認